ひまわりからのメッセージ

129号
2022.6.13
NPOひまわりの花
西濃圏域
発達障がい支援センター
発行人：中野たみ子

戯草の花に寄せて

庭先にどくだみの花が咲き、梅雨が真近になりました。どくだみの季節になったので一幅の軸を出してみようと思い立ちました。それは、短歌の軸で一首を四人で詠んだものです。初句から三句までの一句ずつを三人が詠み、最後に四、五句を一人がまとめて一首に仕上げた作品です。

鳴く鳥は
雨の日今を
聲少なく
どくだみの花
しろき庭先

ここ数年は出してなかったので思い立ったのですが、広げたとたんにビリビリと音をたてて破れてしまいました。

戦後まもなくの紙不足の時代の表装なので紙が劣化していたのでしょう。幸い作品の部分は和紙だったため助かったのでしたが、破れた掛軸を前に作品が詠まれた当時の人達のことを思い起こしました。

思想統制があり、文学の世界にも雑誌の発刊停止や黒ぬりの教科書などもあったと聞きますから、歌人たちが集ってこの様なことをすることは、戦時下ではできなかったことで、戦後にやっとひとときの安らぎの時がもてたということでしょう。

戦後七十六年と言われても、私でさえ戦後生まれですから多くの人にとって戦争は遠いできごとに違いありません。日本は豊かになり、物があふれ、廃棄される食材はとても多くあると聞きます。子どもたちの欲しい物はすぐ手に入り、好きなことさえしていれば良いという風潮も広がっているように思いますが、一方では貧富の差は広がり、児童虐待や障害のある方や高齢者に対する虐待もあとをたちません。

ウクライナに対するロシアの侵攻のニュースは、決して他山の石と片づけられないような気がします。もしも今、何かが起きたらどうなるのでしょう。末長く安泰であるという保障はありません。そう考えると、今の私たちの生活を少し見直していく必要があるように思えるのです。皆さんはどう思われますか？

破れてしまった掛軸を表装し直してもらおうと思いながら庭に出て、どくだみの花を剪ってきて備前の一輪ざしにいけてみました。暗い部屋の一隅に花の白がきわだって、どくだみの花も捨てがたいと思ったことでした。

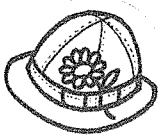
自立に向けて
日々の積み上げの大切さ

センターでは、少しずつ大人の方の相談も入ってくるようになりましたが、親と子のお互いが依存し合っていらっしゃるのだろうと思うこともあります。もちろん家族はお困りなのですが、だからといって成人になられたお子さんに対して「私がいなければこの子は困ってしまうから…」とか「この子には私しかいない。」と強く思われている親さんが少なからずいらっしゃるのではないでしょうか。

息子さんたちの方は、もちろん、「このままではいけない。」と考えておられる方も多いのでしょうが、親に依存し、自己主張を繰り返して次第に親を支配下においておくケースもあるように思います。昔とちがって家にいてもゲームやユーチューブなど楽しめることがたくさんありますから、わざわざ面倒な人との関わりを持つ必要もないのでしょう。食べる物にも困らないし生活は保障されているわけですから、自分の生活を変えようなんて思わないのかもしれません。

こうなる前に何とかならなかったのだろうか と考えた時、家庭でのあり方や園や学校での支援のあり方についても気になることが少なからずありますので、皆さんにも考えていただこうと思います。

こども園でのできごと



T君は年長で支援員がついています。支援の先生はたえずT君に寄り添って世話されています。課題の製作の時は担任のA先生の指示を聞くとT君を促してのり、はさみ、お道具箱などを取りに行きます。席に戻ったT君は、持ってきたものを机の上に置きました。するとすかさず支援員さんはそれらを整とんして机上で折紙が折りやすいように置き直します。そして折紙を手にすると、T君の手を添えることなく折っていきました。その後もT君は担任のA先生の話を聞かず、たえず支援員さんに話しかけ一対一の関係をつづけていきました。

別のクラスのB先生は、クラスの子どもたちに折り紙の折り方を一斉指示で伝えましたが、戸惑っている子がいました。するとB先生は自分も折紙を持って、そのR君の席に行くと、自分の折り紙を折って見せました。折り紙の向きをR君のものと同じ向きにして折ってみせたのです。

さて、この二つのケースの場合、どちらのやり方を皆さんは支持されるでしょうか。同じような場面は小学校でも見られます。

小学校でのできごと

一年生のKさんは、机の上がくしゃくしゃで授業が始まるのに教科書やノートが出せていません。見ると、ひき出しの中も整理されていない様です。どうするかなあと思っていると、支援員さんが来てくれて、必要なものを探し出してくれて机の上を整理してくださいました。Kさんはその間自分で何かをしようとするでもなく、してもらうのを待っていました。

別のクラスでは、同じように教科書もペンケースも出していないDさんに支援員さんがそっと声をかけられていましたが自らが用意しようとはせずに、本人が用意するのを待っておられました。

こども園や学校での支援の様子を見ていて、幼児期にT君のように支援を受け続けた場合に、どのようになっていくのか心配になりました。確かに見た目には他児に遅れることなく過ごしているのでしょうが、結局は、一年生のKさんのような状況を作り出しているとも言えるのではないでしょうか。それに比べてB先生の折り紙支援は、いわゆるモデリングの学習です。R君はモデルを示してもらうことで先生のモデルを注視して記憶し、自分でやってみようと思ってまねをして行動するわけです。けれども、もしR君にそれだけの理解力がなかった場合には、モデリング学習は成立しません。では T君の支援のように、先生や支援員が全てやってあげれば良いのかというと、そうではありません。ボディイメージが弱く自分の手で上手く操作できないのだとしたら、その子の手を取って一緒にやっていくのが大事です。でも対面でやったのでは、その子の本来の手の動きとは異なる動きになってしまいます。ですから側方や後方から、その子の動きに合わせて支援をするのです。

支援をするということは、単にお世話することではありません。対象となる子の発達をしっかり押さえて、その子が自立していけるようにしていくことです。支援員が側につくことで、その子の自立を妨げるのであれば、そんな支援員は不要なのではないでしょうか。

皆と同じペースで進めていくことが難しい場合、大人がやってしまえば簡単かもしれませんがDさんの支援者のように自分で気付いて行うのを見守るのも大切なことです。

担任の先生も支援が必要な子は支援員にお任せにしないで、今どんな配慮が必要なのか相談しながら進めていただきたいと思いました。

生活の中で何でも他人にやってもらう一対一の関係の中では社会性は育ちません。ただ自分中心の子どもを育てているだけかもしれないという認識を私達がもつべきではと思います。

家庭の中で
生活のルールと善悪の判断を！

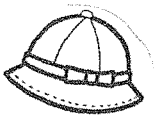
先日のことです。ある成人施設の職員の方が「本当にびっくりするのですが大人になるまで自分の髪を一人で洗ったことがないという方に出会いました。」と驚いておられましたが、私は、さほど驚きませんでした。だって今の子どもたちは誰かにやってもらうのを当然のように育ってきているのですから無理もないことです。T君やKさんの将来の姿かもしれません。

小学生だったら、翌日着ていく服を自分で用意しているでしょうか。朝起きてパジャマをたたむでしょうか。朝食後、食器を流しに運ぶでしょうか。……おそらく否でしょう。「○○を買ってよ。買ってくれないなら～はしない。」「皆はもっているのにどうして買ってくれないの。」等と要求は一人前だけれども、家族の一員として最低限度のこともしないのではないかと想像するのです。歯みがきをしないという子にもたくさん出会います。外国の教育や保育はすばらしいと言われる方は多くいらっしゃいますが、日本で同じことをしても成果が期待できるでしょうか。私は余り期待できないように思います。それは家庭教育が違うからです。

この仕事を長くやってきて、今、思うことは、やはり家庭の大切さです。子どもの発達を考えれば、三歳の「イヤイヤ」は当然ですし、その時期に自分の欲求が全て通るのではないと知ることは大切です。家庭では何でも思い通りになっていて、家庭のルールの無い生活を送ってきて、集団生活を送ろうとすれば当然困難さにぶつかります。

「発達特性がある子だから好きなことだけさせています」ということは、いずれ本人にも家族にも大きな負担となって還ってくるでしょう。社会性を身につけるために大切なこととして集団の中での子どもたちの行動を見直してみましょう。友だちの持ち物をこわしたり、暴力をふるったりすることは、やってはいけないことなのに、「理由があるから…」と、その行動をあたかも良いことのようにかばっていませんか？子どもの気持ちはわかるけれど、でも駄目なことなのです!! やってはいけないことを認めていくことで、子どもたちの中に認知の歪みが生じてきてしまいます。あげくに「僕は悪くない。みんなが悪い。学校が…友だちが…先生が…」ということになることも多いのです。生活の中で自分のことは自分でできるようにしていきましょう。そして善悪の判断を見誤らせないことです。将来親と子が互いに依存し合って、社会と断絶してしまうことのないように、今、ここからです!!

〈お知らせ〉

スイトピアセンター　6-2

センター親の会　七月十一日(月)